傳鈔本『日本國見在書目錄』の系統について

中安眞理

はじめに

平安時代の儒者・藤原佐世（八四七～八九七）の編纂に係る『日本國見在書目錄』（一卷）の傳本は、室生寺（奈良縣宇陀郡に所在する八世紀末頃の創建とされる眞言宗の古刹）舊藏[1]の鈔本一冊（宮內廳書陵部現藏《五〇三―一六〇（舊・特四〇）》）が現存最古のものである。室生寺本と稱されるこの鈔本は、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての書寫成立とされるが、江戸時代後期になってようやくその存在がいわば「發見」された後、それに基づいた多數の傳鈔本（轉寫本）が生れることとなった[2]。從ってその書寫年代は全て江戸時代後期以降に屬するが、その數は『國書總目錄（補訂版）』[3]および『古典籍總合目錄』[4]所載のものだけでも二十點以上にも達している。そこで、筆者はこれら轉寫本の悉皆調査を試みた結果、轉寫本に生じた脫簡の有無およびその相互異同を確認することにより、複數の系統に分類できることが判明した。本稿はこの調査をもとに、これら轉寫本の系統とその意義を明らかにし、あわせて文化年間以降の室生寺本舊藏者の變遷についても整理再考する。

一　室生寺本舊藏者の變遷

室生寺本が巷間に流出した時期や經緯は不明であるが、橋本經亮（國學者・一七五五～一八〇五）『梅窓筆記』（卷之二）の記述により廣く世に知られるようになった。『梅窓筆記』は經亮の沒後翌年、文化三年（一八〇六）に京都の書肆竹苞樓（鶴鶉〈錢屋〉惣四郎）から刊行されたものだが、そこに「大和室生寺ノ印アル古本粘葉一冊、書肆ガ買得セシヲミルニ、五六百年前ノ古本、（中略）希代ノ書ナリ。」[5]とある。室生寺本はこの頃竹苞樓にあったことが伊澤蘭軒の『長崎紀行』[6]からも知られ、經亮のいう「書肆」とは竹苞樓であることがわかる。

ところで室生寺本が竹苞樓の所藏になる前、「美濃大津文庫」にあったとする所傳があるが（後述Ⅲ―③參照）、この文庫については未だ詳らかでない（あるいは名古屋の眞福寺「大洲（須）文庫」を指すか）[7]。

室生寺本はこの後、江戸時代後期の考證學者狩谷棭齋（一七七五～一八三五）が竹苞樓から入手する[8]。入手の時期について、「文政元年九月五日一讀畢」の奧書をもつ靜嘉堂文庫藏狩谷棭齋自筆書入本（Ⅰ

―②）を調査すると、室生寺本に比して脱簡を補った痕跡や、文字の誤脱が確認できるのであって、もしこれが室生寺本の臨模であるならば、[9]これらの事實は考えにくい。従って、椒齋の入手は奥書の日付、文政元年（一八一八）九月五日以降と考えられ、さらに文政九年（一八二六）五月二十一日には椒齋の手元にあったことが知られることから、[10]文政九年以前と定められる。その經路については、椒齋西遊の折とする所傳が多く見られ、[11]文政元年から九年にかけ、椒齋は文政二年（一八一九）と文政四年（一八二一）の二度西遊しており、[12]このいずれかの際に購得したと考えられる。中根肅治（帝國圖書館司書・一八四七～一九二一）『室生寺本日本現在書目錄攷』[13]（以下中根肅治『目錄攷』と略す、乙―⑧）には次のように文政年間の購入について記している。

椒齋カ此目録ヲ得タル顛末ノ傳説ヲ略記スヘシ文政年間狩谷椒齋西京ニ遊ヒシ際一日書估カ種々ノ書籍ヲ携ヘ来リシニ其中ニ偶ト豫テ望ヲ属セシ室生寺ノ印アル『日本現在書目録』ノアリケレハ椒齋心中大ニ喜ヒ其價ヲ問フニ六十匁ト答フ此頃ノ古本一冊ニテ金壱両ハ甚不廉ナレトモ椒齋ハ書估ノ言フカマニ〳〵直ニ之ヲ購ヒタリト云後ニテ聞ケハ此書室生寺ヨリ出テシ以来数々書肆ノ間ニ展轉セシモ到底書估ノ望ム如キ直(ママ)ニハ賣レサルヨリ此度椒齋ノ上京ヲ聞キ某和学者椒齋ノ学力ヲ試ントテ書估ヲシテ頗ル高價ヲ述ヘシメシニ直ニ之ヲ買取リシカハ某学者ハ大ニ其鑑識ニ驚キタリ是ヨリ遽(ク)ニ椒齋カ博学ノ名嘖々タルニ至レリト云フ（書名には『　』を施す。以下同）

こうして室生寺本は椒齋の所藏となった。椒齋は弘前藩の江戸の御藏元を代々勤めた米問屋津輕屋の十二代目であったが、津輕屋は天保の冷害で經營難となり、家財、土地などを賣却して暖簾を守った。椒齋が蒐集した古典籍も没後天保八年から九年にかけ賣却されている。[14]これと時を同じくするかは不明だが、中根肅治『目錄攷』によれば、室生寺本はその息・懷之から津輕公（弘前藩主）に渡った。[15]

狩谷氏ハ津輕公ノ用達ニテアリシカハ懷之ノ時ニ至リ右ノ目録ヲ公ニ贈呈セシニ公ハ之ヲ時ノ老中水野公ニ贈リショリ久シク人間ニ出サリシカ明治初年水野公ヨリ拂本ノ出シ際此目録ノ混入シアリシヲ森養竹【立之】之ヲ求メテ私蔵シ其目録ニ校異跋文ヲ付シタリ（【　】内は割注。以下同）

室生寺本はさらに津輕公から水野忠邦（老中・一七九四～一八五一）に獻上され、明治初年に水野家から拂本が出た中に、室生寺本があるのを森立之（たつゆき）（書誌學者・漢方醫・一八〇七～一八八五）が求め私藏したことがわかる。

森立之が認めた明治二年（一八六九）春の次の識語からもその入手經緯が明らかである。[16]

『見在書目』一冊、其原本為鳥子紙胡蝶装、冊皮表面有室生寺三字、則為當寺舊蔵可知也、此書文政年間狩谷椒齋遊西京之日、所百計而購得、實是天下無二之寶典、椒齋没後以善賈轉移、経朱門諸家之咸(ママ)、不出人間已三十年、余也自少従翁而讀『尓疋』『説文』及本艸諸書、今此書終入我庫中、固非偶然、則子孫宜永保咸(ママ)之耳、明治己巳春日枳園森立之書于西薇福山城東醫者坊之長聳松下寓居（読点は原本による。以下同）

この中で森は、文政年間に椒齋が室生寺本を京都で購得したこと、それが椒齋に師事していた森の手に入ったのも偶然ではないことを述べている。

また次の如く、青山文庫本（Ⅳ―⑦）にも森の明治十二年（一八七九）十二月の識語が書寫され、明治二年の識語との内容の重複が見られる。

『日本國見在書目録』一冊

鳥子紙両面書胡蝶装冊皮表面ニ室生寺ノ三字アリ當寺ノ舊(ママ)感タルコト知ルベシ此書文政年間狩谷棭翁西京ニ遊フル日百計シテ得ル所實ニ天下無二ノ寶典ナリ翁没後善賈ヲ以テ朱門諸家ニ轉移シ人間ニ出ザルコト已三十年立之少年ヨリ翁ニ従テ『爾雅』『説文』及ヒ本草ノ諸書ヲ對讀ス此書終ニ我カ庫中ニ入ル固ヨリ偶然ニアラサルナリ此書字体墨色ヲ以テ考ルニ寛平中佐世勅撰ノ時ヲ去ルコト遠カラス今ヲ距ルコト殆ント九百年ノ物タルコト明ラカナリ貴重セサル可カラサルナリ

明治己卯涂月七十三翁枳園森立之

次は明治十三年（一八八〇）春の識語。森はこの年、室生寺本を高木壽頴に譲り、同年五月、高木から東京博物館に奉獻された。本書が收納される桐の内函の蓋に記されているものである。

此書狩谷棭齋翁在西京所得翁捐舍以来已四十餘年此際一時入我庫中又出經諸家之蔵而再復帰我手蓋顯晦有時非人之所能為也一日訪高木法古齋語以及示此矣遂將有以天下無二之物出于世而共同其楽之挙余深感其意先以此書為天下無二割愛而贈焉乃欲不以一人之所楽為楽而与天下同楽之微志在于斯耳

明治庚辰春日　　七十四翁森立之

これによると、室生寺本は森の庫中にあったが、一時人手に渡り、再び森の手元に戻ってきたという。ここまでを整理すると、森は明治二年（一八六八）に入手したものの、その後一旦手放し、明治十二年（一八七九）頃に再入手したと考えられる。

二　轉寫本の系統

ところで、棭齋の室生寺本入手が文政二年または四年頃と考えられることは既述したが、それより先に、脱簡のある模寫本が流布していたことが以下の記述によって想像される。

すなわち前出の『梅窓筆記』を見た伴信友（國學者・一七七三～一八四六）が、ようやく入手したのも同種の模寫本で、息・信近に書寫せしめ、文化十三年（一八一六）十二月に奥書を記している。後に信友は室生寺本を披覧することを得て校合し、天保二年（一八三一）五月八日に奥書を追記、脱簡を指摘している（Ⅰ―①）。

さらには岡本保孝（やすたか）（國學者・一七九七～一八七八）『難波江』にも「棭齋買得ラレザリシサキニ、京都ノ書肆某ウツシツタヘテ、江戸ニモ傳播シタルガ脱簡アリ。其寫本ヨリ又ウツシテ持タラン人ハ、今ノ刊本ニテ補入スベシ。」[17]とある。

これらをあわせると、室生寺本が棭齋の所有となる前に、おそらく竹苞樓により轉寫本がつくられており、この時點で脱簡が生じたとも考えられる。なお、國會圖書館龜田文庫本（Ⅳ―⑤）の天保六年（一八三五）の識語は、棭齋が室生寺本の寫本十通を二十兩で買い取ったとするが、天保年間に入っても依然として複數の寫本が流布していた可能性を讀み取ることができる。

さて、室生寺本を祖とする轉寫本を調査した結果、まず脱簡のある模寫本を親本とするものと、脱簡のない模寫本を親本とするものとの二者に大別できることがわかった。ここでは前者を甲群、後者を乙群と呼ぶこととする。それぞれの奥書の年號のうち初期のものを比較す

ると、甲群は伴信友校藏本（Ⅰ—①）の文化十三年（一八一六）であるのに對し、乙群は阪本龍門文庫本（乙—①）の文政十一年（一八二八）となっており、甲群の出現の方が早い。これは脱簡のある模寫本の流布が先立つことを裏付ける。甲群はさらに脱簡・錯簡の箇所の差異により次のように分類される。

（系統）（脱簡部分　丁數は室生寺本該當部分、表記は原本通り）

Ⅰ類　第三丁裏～第四丁表、第九丁裏～第十丁表

Ⅱ類　第三丁裏～第四丁表、第九丁裏～第十丁表
　第十五丁表

Ⅲ類　第三丁裏～第四丁表、第九丁裏～第十丁表
　第三十三丁表一行後半「三開三卷　〻〻畠一　海島二」
　二行末尾「術六　夏侯」
　第三十六丁裏三行末尾「明鏡要經一」

Ⅳ類　第三丁裏～第四丁表、第九丁裏～第十丁表
　第三十四丁表一行後半「〻〻精」「一」「〻〻卦」
　二行中部「書二」
　三行後半「宝劒鏡卞法一」
　四行後半「五姓宅撓一　合〻〻〻」
　五行末尾「〻〻經二」
　六行末尾「法四卷　〻〻式一」
　第三十五丁裏六行冒頭「京房雜占一」
　第四十三丁と第四十四丁が前後錯簡

右より、甲群には室生寺本第三丁裏～第四丁表と、第九丁裏～第十丁表にかけての脱簡の共通が看取され、書肆作成の模寫本にこの特徴があったことは明らかである。その他、甲群にほぼ共通する誤脱を擧げると、第十四丁表一行「十一正史家」の「十一」が脱落、第二十五丁裏六行「袖中書十一」が「袖中唐十一」、第二十九丁裏四行「撑基法一」が「樟基法一」、第三十二丁裏三行「元嘉曆一」が「九嘉曆一」、第四十丁表一行「雜注〻〻十」が「雜注〻〻一」などがある。

また、卷末に着目すると、系統毎に共通しているのも大きな特徴である。甲群Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ類は本文末尾「本朝見在書目錄　其後渡來數卷」で終わり、室生寺本の識語を缺く。甲群Ⅲ類は本文末尾に續けて、『大日本史』卷二一五藤原佐世傳を轉寫する。一方、乙群は室生寺本の識語を轉寫する。（表一參照）

三　現存轉寫本の書誌解說

まず、祖本である室生寺本の書誌について把握しておきたい。

法量は縱二八・二㎝、横一七・〇㎝。粘葉裝。料紙は楮と雁皮混合紙。表紙は本文共紙。本文丁數四十六丁。表紙に「外典書籍目錄／室生寺」と書き外題。一面六行。白界（押界）。界高二四・三㎝、界幅二・五㎝。第一丁內題「日本國見在書目錄」下に「森氏開萬冊府之記」（森立之）陽刻方形朱印を捺す。その下に縱約三・五㎝、横約二・〇㎝の方形朱印削去痕あり。さらにこれらの左横に縱約七㎝、横約三㎝の印記削去痕あり。第七丁裏一行目下に「大和室生寺」印（無郭、朱印カ）あり。第十八丁表四行下に「森氏」（森立之）陽刻方形朱印あり。その下、地の横界に沿い縱約三・五㎝、横約二・〇㎝の方形朱印削去痕あり。第四十六丁裏四行下に縱約九㎝、横約四㎝の印記削去痕、同丁尾題「本朝見在書目錄」下に「椛齋」（狩谷椛齋）陽刻圓形朱印あり。裏表紙見返しに識語あり。[18] その餘白に「髙木壽頴藏書之記」（髙木壽頴）陽刻方形朱印を捺す。（この印記と、第一丁および第十八

表一　『日本國見在書目錄』轉寫本分類表

群別		甲群（脫簡あり）																													乙群（脫簡なし）							
系統		I類											II類		III類									IV類														
番號		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	①	②	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
所藏機關名等		京大附圖	靜嘉堂文庫	國立國會圖	都立中央圖	九大附圖	天理圖	書陵部	筑波大附圖	東大附圖	大阪中之島圖	東大史編所	內閣文庫	日本書目大成	京大附圖	京大附圖	岩瀨文庫	鈴鹿文庫	東京國立博	書陵部	茨城大附圖	神宮文庫	書陵部	筑波大附圖	青山文庫	靜嘉堂文庫	高野山大圖	國立國會圖	神宮文庫	青山文庫	阪本龍門文庫	靜嘉堂文庫	大阪中之島圖	多和文庫	尊經閣文庫	四寺國佛大	京大附圖	京大附圖
脫簡	第3丁裏〜第4丁表、第9丁裏〜第10丁表	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○								
	第15丁表												○	○																								
	第33丁表1行後半「三開三卷　ゝゝ劍一　海島二」														○	○	○	○	○	○	○	○	○															
	2行末尾「術六　夏侯」														○	○	○	○	○	○	○	○	○															
	第34丁表1行後半「ゝゝ精」「一」「ゝゝ卦」																							○	○	○	○	○	○	○								
	2行中部「書二」																							○	○	○	○	○	○	○								
	3行後半「宝劍鏡卞法一」																							○	○	○	○	○	○	○								
	4行後半「五姓宅撓一　合ゝゝゝ」																							○	○	○	○	○	○	○								
	5行末尾「ゝゝ經二」																							○	○	○	○	○	○	○								
	6行末尾「法四卷　ゝゝ式一」																							○	○	○	○	○	○	○								
	第35丁裏6行冒頭「京房雜占一」																							○	○	○	○	○	○	○								
	第36丁裏3行末尾「明鏡要經一」	○					○			○					○	○	○	○	○	○	○	○	○															
錯簡	第43丁と第44丁																							○	○	○	○	○	○	○								
卷末	本文末尾まで	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	○	○	○	○	○	○								
	本文末尾に續き『大日本史』佐世傳を轉寫														○	○	○	○	○	○	○	○	○															
	本文末尾に續き室生寺本識語を轉寫																														○	○	○	○	○	○	○	○

注：丁數等は室生寺本による。「その他」分類の2點については記載を省略。

丁の方形朱印削去痕と形状がほぼ同じであることは注意される）

凡例

一、所藏機關名を掲げ、《　》内に各所藏機關の整理・函架・請求番號を記す。

一、冊數はすべて「一冊」。

一、外題は墨書・書き題簽の場合のみ（簽）と記す。

一、法量は縱×横、單位はセンチメートル。

一、行數・字配りは室生寺本（一面六行）に準ず。異なる場合は併記す。

甲群　脫簡あり

一類　十一點

I—①　京都大學附屬圖書館《四—二一・八・四（第六帙第四十五冊）》

〔外題〕日本國見在書目錄（簽）（扉あり「外典書籍目錄／室生寺」）

〔法量・丁數〕二七・二×一九・三、五十四丁

伴信友校藏書。[19] 脫簡部分と職語を室生寺本から臨模。本書に見える信友の奥書については、少々加筆があるが『比古婆衣』（卷之六）「見在書目錄を寫して奥に書つけたる」の條[20]を參照。

I—②　靜嘉堂文庫《一〇四函一二架竹》

〔外題〕日本國見在書目錄（法量・丁數）二九・二×二二・五（原料紙）、四十九丁（印記）「竹添光鴻之章」「井々竹添氏之圖章」（竹添井々・漢學者・外交官・一八四二～一九一七）、「松方文庫」（松方正義・薩摩藩士・內閣總理大臣・一八三五～一九二四）（奥書等）「文政元年九月五日一讀畢」

狩谷棭齋自筆書入本。奥書も卷頭卷末職語および本文行間の書入と同じく、棭齋の筆と見て良い。原料紙とほぼ同じ大きさの襯紙に貼付改裝され、隱し丁付が確認できる。注意すべきは、「二」と「三」、「七」と「八」の間にそれぞれ「三上」、「七下」と後に一丁ずつ追加されている點である。追加部分の本文內容を室生寺本と照合したところ、室生寺本の第三丁裏～第四丁表、第九丁裏～第十丁表に相當することが分かった。この部分は甲群に共通する脫簡であり、補寫と考えられることから、棭齋が最初に手にしたのは、脫簡のある寫本だったことが明らかである。さらには甲群にほぼ共通する誤脫に加え、室生寺本第十九丁裏一行末尾「神仙傳廿卷【葛洪撰】」の缺落がみえる。奥書の後に、室生寺本識語と『大日本史』佐世傳を轉寫する。

I—③　國立國會圖書館《一三四—二四九》

〔外題〕日本國見在書目（簽）（法量・丁數）二三・三×一六・六、四十丁（行數）下象鼻に「乾軋堂藏」と刻する墨刷罫紙（單邊有界十行）に上下二～三段に書寫（奥書等）「此書。前田夏蔭所藏也。夏蔭謂。佐世者。宇多帝時人。距今九百有餘歲。與菅公同時。又謂此書目傳在于京師某處。祕而不出。[21] 貪緣寫得數通。其章按。書目似多誤字。想轉寫訛耳。今依舊本不敢改。如其可疑。則俟他日考。文政辛巳四月十有六日記。」（句點・傍線は原本による）

前田夏蔭（幕臣・國學者・一七九三～一八六四）所藏本からの轉寫と思われる。文政四年（一八二一）四月十六日の奥書。

I—④　東京都立中央圖書館市村文庫《025—IW—3》

〔外題〕本朝見在書目錄（簽）（法量・丁數）二七・二×一八・七、四十七丁（奥書等）「天保九年三月二十二日書寫畢／花押（未詳）」

市村瓚次郎舊藏。卷末に『三代實錄』『日次記』『江談抄』『本朝續文粹』等の佐世關連の記事を拔粹する。

I—⑤　九州大學附屬圖書館醫學分館《ニ—二〇》

〔外題〕日本國見在書目錄（簽）（法量・丁數）三二・五×二一・〇、

五十二丁

巻末に市村文庫本（Ⅰ—④）と同文の抜粋を記すが、細部の脱落に異同があり[21]、両者は共通の親本からの轉寫と推測される。脱簡部分および室生寺本識語を古逸叢書本から別筆にて補寫する點も市村文庫本と異なる。

Ⅰ—⑥　天理大學附屬天理圖書館《〇一九—イ一一》

〔外題〕（不明。原題簽剥離痕あり）〔法量・丁數〕二六・八×一九・五、四十四丁〔印記〕「戸澤文庫」（戸澤正令・新庄藩主・一八一三～一八四三）、「紅梅文庫」（前田善子・藏書家）

Ⅰ—⑦　宮內廳書陵部《一〇二—一四三》

〔外題〕日本國見在書目錄（簽）〔法量・丁數〕二六・九×一八・八、四十六丁〔印記〕「溫故堂文庫」（塙家）

Ⅰ—⑧　筑波大學附屬圖書館《イ〇五〇—一二三〇》

〔外題〕本朝見在書目錄（簽）〔法量・丁數〕二七・〇×一九・三、四十四丁

Ⅰ—⑨　東京大學附屬圖書館渡部文庫《A10—1033》

〔外題〕日本國見在書目錄（簽）〔法量・丁數〕二七・一×一八・九、四十四丁〔印記〕「渡部文庫珍藏書印」（渡部信・東京帝國大學法科大學講師・一八八四～一九七三）

渡部信が大正十三年（一九二四）二月二十日に寄贈したもの。

Ⅰ—⑩　大阪府立中之島圖書館《〇一四—一六》

〔外題〕大日本國見書目表（簽）（扉あり「外典書籍目錄／室生寺」）〔法量・丁數〕二六・九×一九・二、五十三丁〔印記〕「紀伊國德川氏圖書記」（和歌山藩德川家）、「初代豐田文三郎氏遺書」

豐田文三郎（一八五三～一八九六）は大阪の政治家。伴信友校藏本（Ⅰ—①）の模寫と思われる。

Ⅰ—⑪　東京大學史料編纂所《三〇〇五—一》

〔外題〕（表紙無し）〔法量・丁數〕三二・〇×二一・一（原料紙）、四十七丁

料紙より大きな襯紙に貼付改裝。脱簡部分を古逸叢書本より別筆にて補寫。

‖類　二點

Ⅱ—①　國立公文書館內閣文庫《二一八—〇一三四》

〔外題〕本朝見在書目〔法量・丁數〕三二・九×二二・三、四十四丁〔印記〕「林氏藏書」（林述齋・漢學者・一七六八～一八四一）、「昌平坂學問所」（昌平坂學問所）、「淺草文庫」（淺草文庫）

林家第八代大學頭・林述齋は、昌平坂學問所が寛政九年（一七九七）に幕府直轄となった際、「林氏藏書」印を捺して、藏書を學問所に移管した。本書が寛政九年以前の書寫とすると、室生寺本を知らしめた橋本經亮『梅窓筆記』が刊行される前のことになる。ただし、當初押印に遺漏した本もあり、文化十五年（一八一八）刊本『海錄碎事』に見えるのが最も遲い例といい[22]、本書も同様の可能性はある。

Ⅱ—②　『日本書目大成』第一卷影印（汲古書院、一九七九年）

〔外題〕見在書目〔行數〕一面九行（補寫部分を除く）〔印記〕「竹添氏書庫」（竹添井々）〔奥書等〕（青山文庫本Ⅳ—⑦に同じ）

青山文庫本（Ⅳ—⑦）から出たとされているが[23]、室生寺本第三丁裏～第四丁表、第九丁裏～第十丁表、第十五丁表の脱簡を補寫することから、Ⅱ類（Ⅱ—①か）に係る寫本を青山文庫本と校合し、書入および巻末識語を移寫したものと思われる。このうち田中光顯（土佐藩士・宮內大臣・一八四三～一九三九）の識語には、明治二十三年四月二日

に『禮記』子本疏義零本を購得した旨が記されている。青山文庫本には、この零本について「是書後ニ早稻田大學ニ寄藏ス光顯再識」と追記されるが、一方書目大成本には見えない。よって校合の時期は、光顯の零本購得以降、それを早大に寄贈した明治三十八年十月十四日[23]以前になるだろう。

Ⅲ類　九點

Ⅲ—①　京都大學附屬圖書館《一〇—〇一・イ・三（第五帙第五〇冊）》

〔外題〕國朝見在書目錄〔法量・丁數〕二六・九×一九・二、四十五丁

岩垣龍溪（漢學者・一七四一～一八〇八）とその養子岩垣東園（漢學者・一七七四～一八四九）舊藏。

Ⅲ—②　京都大學附屬圖書館《四—四九・ニ・三》

〔外題〕日本國見在書目錄〔簽〕〔法量・丁數〕二七・〇×一八・七、四十六丁〔印記〕「百々復太郎寄贈」（百々復太郎）〔奥書等〕「寺町錢宗藏本／群書類從本【臨大和國室生寺藏本云】／右二件校本目」

『和漢書分類目錄第一』（京都帝國大學附屬圖書館）によると百々綯（漢方醫・～一八七八）校本。表紙見返・本文行間に朱筆校訂あり。脫簡を付箋・朱筆にて後補。百々復太郎は百々綯の第五子で、明治期に京都療病院に奉職した。[24]

Ⅲ—③　西尾市岩瀨文庫《一〇—九四》

〔外題〕日本國現在書目錄〔簽〕〔法量・丁數〕二六・九×一九・〇、五十四丁〔印記〕「錫□（定カ）」（山本錫夫・漢方醫・本草家・一八〇九～一八六四）〔奥書等〕「右『見在書目』一卷嘉永四年辛亥正月以鳩窗百百氏臨寫之本再摸寫焉　榕室山本錫夫／（この閒に「本文校正」が入る）／右『見在書目』原係美濃大津文庫藏本有故落於書賈之手狩谷棭齋【津輕屋三右衞門】偶遊京師購而東帰有惜世少傳本者臨寫以傳鳩窗氏介書賈文盛堂再臨藏焉鳩窗氏之所校正就字傍朱書今以鳩窗氏之本臨摸別輯所校正間亦加臆見以附卷末　榕室山本錫夫又識」

百々綯が文盛堂という書肆を介して得た臨寫本を、山本錫夫がさらに臨模したもの。つまり親本は、Ⅲ—②ということになる。百々の朱筆校訂を卷末にまとめる。

Ⅲ—④　大和文華館鈴鹿文庫《〇—二九七五》

〔外題〕本朝見在書目錄〔丁數〕四十七丁（複寫物による）〔印記〕「尙褧舍藏」（鈴鹿連胤・國學者・一七九五～一八六七）

續群書類從版本の識語[26]を付箋に轉寫し、本文の後に貼付。

Ⅲ—⑤　東京國立博物館《と八六五九》

〔外題〕日本國見在書目錄〔簽〕〔法量・丁數〕二七・〇×一八・八、四十六丁〔印記〕「月の屋」（横山由清・國學者・一八二六～一八七九）、「德川宗敬氏寄贈」

Ⅲ—⑥　宮內廳書陵部《一〇一—一〇一》

〔外題〕日本國見在書目錄〔法量・丁數〕二七・二×一九・九、四十七丁〔印記〕「勢多藏書」（勢多章甫・明法家・一八三〇～一八九四）、「久迩宮文庫」（久迩宮家）〔奥書等〕「安政七年庚申季春上浣以或本摹寫校訂畢／律學博士中原章甫」

勢多章甫が安政七年（一八六〇）三月上旬に校合を終えたもの。脫簡を異本より補寫し朱筆校訂する。

Ⅲ—⑦　茨城大學附屬圖書館菅文庫《一1一四》

〔外題〕日本國現在書目錄〔簽〕〔法量・丁數〕二六・九×一八・四、四十六丁

菅政友（水戸藩士・國學者・一八二四～一八九七）舊藏。

Ⅲ―⑧　神宮文庫《一一門一八二號》

〔外題〕日本國見在書目錄〔法量・丁數〕二七・一×一八・八、四十六丁〔印記〕「阿波岐曽能藏書」（大津立嘉）、「林崎文庫」（林崎文庫）

Ⅲ―⑨　宮內廳書陵部《一〇二―一五五》

〔外題〕見在書目錄〔法量・丁數〕二六・九×一八・五、四十六丁〔印記〕「諸陵寮圖書記」（宮內省諸陵寮）

Ⅳ類　七點

Ⅳ―①　筑波大學附屬圖書館《イ〇五〇―五〇》

〔外題〕日本見在書目錄〔法量・丁數〕二六・七×一九・一、四十四丁〔印記〕「岸本家藏書」（岸本由豆流・國學者・一七八八～一八四六）、「那珂」（那珂通世・歷史學者・一八五一～一九〇八）

次掲青山文庫本（Ⅳ―②）の親本とすると、文化十三年（一八一六）十一月以前に岸本由豆流の所藏となったものだろう。

Ⅳ―②　佐川町立青山文庫《〇一二―二三―S》

〔外題〕本朝現在書目〔法量・丁數〕二七・三×一九・五、四十五丁〔印記〕「青山」（田中光顯）、「大正拾五年寄藏于青山文庫田中光顯」〔奥書等〕「文化丙子仲冬騰寫（ママ）（墨抹）散漁／原本椹園藏書」の次に「橘經亮『梅窗筆記』卷下曰」として『日本國見在書目錄』に關する記事を引用、次頁に「右ノ經亮ハ京都梅宮神主橘本肥後ト云人也文化初メマテ此書目世ニシラレス有シカ此比四五本江戸ニ來リ又予モ岸本藏書ヲモテ寫シオクナリ『梅窗』カ云シ如ク實ニ希代ノ珍書ニテ貞觀中文學ノ盛ナリシコトヲ見ニタルモノ也『和名抄』ノ引書ヲ考覆セントテ隋唐ノ志ニヨリテ撿勘セシカ兎角ラチ明カデ困シタリシニ此書目ヲ一披スレハ欵瓦解シテヨリ考覆スルコトヲ得タリ此書ハ『唐書』ヨリ先ニ出來タルモノニテ彼此佚亡ノ書目多クミエタリ佐世ノコトハ『三代實錄』ニモ出タリ／丙子仲冬十六日再記」。

岸本由豆流藏本（おそらくⅣ―①）を元に、文化十三年（一八一六）十一月に模寫を終えたもの。右の識語より、この頃江戸に轉寫本が複數到來していたことが知られる。裏表紙に「島田蕃根藏本」の墨書があり、島田蕃根（佛教學者・一八二七～一九〇七）舊藏。

Ⅳ―③　靜嘉堂文庫《七九函五九架富》

〔外題〕本朝見在書目錄〔法量・丁數〕二七・二×一八・五、四十四丁（全九十一丁のうち該當部分）〔印記〕「慶元堂」（松澤老泉・書肆・一七六九～一八二二）、「青柳館文庫」（青柳文藏・漢方醫・一七六一～一八三九）

『足利學校藏書考』、『諸子辨并序』と合冊。

Ⅳ―④　高野山大學圖書館三寶院文庫《〇一一―三―四》

〔外題〕日本現在書目〔法量・丁數〕二七・二×二〇・〇、四十六丁〔印記〕「隨心院」（高野山隨心院）〔奥書等〕「無量壽院　花押（得仁）」

得仁（僧侶・一七七一～一八四三）の所藏は無量壽院門主となった文政九年（一八二六）十一月以降と推測される。次掲龜田文庫本（Ⅳ―⑤）との係わりを假定した場合、江戸にて書寫したものが天保六年（一八三五）以前に仁井田長群に傳わる必要がある。文政九年から天保六年にかけ、得仁は文政十年（一八二七）と天保五年（一八三四）の二度江戸に在番しており、[27]このいずれかの折に入手したものか。

Ⅳ―⑤　國立國會圖書館龜田文庫《025.22―N685―H》

〔外題〕現在書目錄（簽）〔法量・丁數〕二七・〇×一九・三、四十

七丁〔印記〕「今井氏記」（今井良恭・漢學者・一八一四～一八三八）、「龜田藏書」・「貯春樓」（ともに龜田次郎・國語學者・一八七六～一九四四）〔奥書等〕「天保六年乙未二月從仁井田源一郎長群藏本影抄」、「天保乙未二月廿日今井良恭謹校」

錯簡部分について「葉原本惣集家ニ入ル今改メ編ム」と朱書し復元する。本書は、仁井田長群（漢學者・一七九九～一八五九）の藏書を今井良恭が寫し、天保六年（一八三五）二月二十日に校合を終えたもの。第一丁と最終丁には識語が見えるが、記入面を内側に折り込み、しかも第一丁は上下を逆にして綴じている。第一丁は和文、最終丁は漢文で文面は次の如くである。ほぼ同内容だが、漢文の方は書きかけと見える。

この書は世に久く伝本なかりしに一と年京師の人何某なる者蜩蠋店を過りつるに古き書冊を剪りて蠋の心に製り居たりその者立よりて見るに未た目にも馴さる書なりしかは終の價をとらせて買とりつ持帰りて写し綴てひめ置けるにその頃江戸に津軽屋三右衛門といへる古き書はさらなり器もの調度なとまて古し物を好みてあまた秘め持てる者なりこのよしを傳え聞きてその同志の者と相議りて金弐十両にて写本十通を買とりたり近き比高野山の僧江戸にてその本を見る事を得てうつしとりきたりしを仁井田源一郎長群に伝えたりいま又その本をかりて抽き筆にうつしとりぬ[28]

京人某氏一日過市有蠋工剪裁書冊者奇而撿之即此書也出嚢錢數十以貿焉繕寫珍什不敢示之人江戸人津輕屋三右衛門者好古之士也遥聞之而欽慕請之見ルコトヲ不許固請彼即云若贈以二十金則與寫本十通三右即與同志相議醵金以得之云近日雄(ママ)出仁井田氏得之高野山某院予請而見之繕録一通以藏篋笥凡誤字衍(錯簡歟)脱悉從舊本字數多少筆畫詳略皆亦不校改(カ)以從舊本又朱書其傍以便覧觀考高田與清『擁書漫筆』載此書之事今抄録于左

『擁書漫筆』四巻ニ云『日本國見在書目録』

右より、高野山の僧が江戸で作成した書寫本が長群に傳わったことがわかる。當時長群は父・好古とともに『紀伊續風土記』の編纂に携わっていた。「高野山某院」は無量壽院、「高野山の僧」は、同院門主得仁の可能性があり、長群が見たのは三寶院本（Ⅳ―④）だったのかもしれない。

Ⅳ―⑥　神宮文庫《一一門三四〇八號》

〔外題〕日本國見在書目録〔法量・丁數〕二七・六×一九・七、四十六丁〔印記〕「布久武良」（福村履正カ）〔奥書等〕「狩谷棭齋云、此書は『隋(ママ)書』藝文志『隋書』經籍志につつきて『唐書』藝文志よりふるし古書を考索せん人はよく校訂を加へてかならすそを右におくへき物之」「右『本朝見在書目録』一卷借足代弘訓神主之本如本書摸寫焉／天保十五年三月廿四日　度會履正」

度會郡出身の畫家・福村履正（一八一八～一八六八）が、足代弘訓（外宮神官・國學者・一七八四～一八五六）藏本から模寫したもの。

Ⅳ―⑦　佐川町立青山文庫《〇一二―二四―S》

〔外題〕日本國見在書目録（簽）〔法量・丁數〕二八・九×二〇・八、五十丁〔印記〕「青山」（田中光顯）〔奥書等〕「明治廿三年四月二日余東京小石川區關口芭蕉菴ニ在リ南村島田蕃根翁雨ヲ衝テ草菴ヲ敲キ懷ヨリ一卷ノ古書ヲ出シ之ヲ示サル熟視スルニ此書目中ニ載スル所ノ『周禮』喪服小記子本義疏ナリ卷首斷滅スト雖トモ讀テ卷末ニ到レハ則チ其ノ卷ノ第五十九ノ零本タルコトヲ知レリ卷末内家私印ノ朱章ヲ捺ス思フニ唐人若クハ奈良ノ朝以前ノ古寫本ニシテ鬼神ノ呵護(ママ)ニヨリ

今日ニ存スルモノナラン驚喜ノ餘重資ヲ抛テ之ヲ購得シ永ク寶藏スト云／警視總監陸軍大將從三位勳二等子爵田中光顯誌」（此段朱筆。なお「義疏」の語は後に「疏義」と墨書で訂正）「是書後ニ早稲田大學ニ寄藏ス　光顯再識」「以數本參校　新井政毅」「是書舊友新井政毅ノ余ニ贈ル所ナリ森立之ハ余一面識アリシ人ナリ　光顯珍藏　印（青山）」

新井政毅（藏書家・～一九〇二）から田中に贈られたもの。墨色の違いから、Ⅳ類に共通する脱簡を異本より補寫したことがわかる。おそらく國會圖書館藏本《よ八》（後述乙―⑧參照）より、森立之の書入及び識語を移寫。[28] 青山文庫にはまた『日本國見在書目錄附考　撫掖翁草本』《〇一二―二五―S》が收められている。全三丁、内容は掖齋自筆書入本（Ⅰ―②）卷頭卷末識語の模寫で、奥書「明治廿三年十月十日新井政毅敬摹」「是一冊新井政毅ノ書寫シテ余ニ贈ル所ナリ／青山居士光顯識」より、新井の明治二十三年（一八九〇）の書寫を田中が得たことがわかる。新井の作成に係るものはこのほか「明治廿年十一月」記の古逸叢書本の模寫本（内閣文庫藏）がある。[29]

乙群　脱簡なし　八點

乙―①　阪本龍門文庫《六五三》

〔外題〕日本國現在書目（扉あり「外典書籍目錄／室生寺」）〔法量・丁數〕二七・四×一九・八、四十九丁〔印記〕「竹屋藏書」（竹屋光棣）、「三浦文庫」（三浦周行・歴史學者・一八七一～一九三一）〔奥書等〕「文政十一年季夏令少外記職平書寫之／光棣」

竹屋光棣（公家・一七八一～一八三七）が書寫せしめたもの。

乙―②　靜嘉堂文庫《七九函五九架山》

〔外題〕日本國見在書目錄（扉あり「外典書籍目錄／室生寺」）〔法量・丁數〕二七・二×一八・六、四十八丁

表紙に「阿波介以文祕本」の墨書があり、山田以文（國學者・一七六二～一八三五）舊藏。

乙―③　大阪府立中之島圖書館《〇一四―一四》

〔外題〕日本国見在外典書目錄（扉あり「外典書籍目錄／室生寺」）〔法量・丁數〕二六・九×一九・三、四十八丁〔印記〕「惜陰室藏書印」、「初代豐田文三郎氏遺書」〔奥書等〕「右『外典書籍目錄』一卷以京城吉田豐前長吏君孝先生所藏古写本其男以孝君臨摹之而以賜余深感厚意藏之于家不敢許別人窺之況敢出窓外乎弘化丙午五月朔／阪城　山水小堂主人　印（橘中節）　印（士發）[31]」

表紙に「藤佐世朝臣奉　敕撰／祕【不許出于門外】　惜陰藏」の墨書あり。弘化三年（一八四六）五月一日の奥書。

乙―④　多和神社多和文庫《二―一》

〔外題〕本朝見在書目錄（簽）（扉あり「外典書籍目錄／室生寺」）〔法量・丁數〕二七・一×一九・〇、四十八丁〔印記〕「香木舍文庫」「集古清玩」「多和文庫」（ともに多和神社祠官・國學者・松岡調・一八三〇～一九〇四）

乙―⑤　前田育德會尊經閣文庫《二―一九―五四》

〔外題〕日本國現在書目錄（簽）（扉あり「日本現在書目錄」）〔法量・丁數〕二七・〇×一八・一、四十九丁

乙―⑥　四天王寺國際佛教大學圖書館恩賴堂文庫《一四四三》

〔外題〕日本國見在書目錄（扉あり「日本國見在書目錄」）〔法量・丁數〕二七・一×二〇・四、三十二丁〔行數〕一面九行

室生寺本の本文三頁分を二頁に縮寫。

乙―⑦　京都大學附屬圖書館《四―四九・ニ・一》

〔外題〕日本國見在書目錄（扉あり「外典書籍目錄／室生寺」）〔法

量・丁數〕二七・四×一九・八、四十七丁

乙―⑧　京都大學附屬圖書館《四―四九・ニ・五》

〔外題〕日本現在書目錄（簽）〔法量・丁數〕二六・五×一九・〇、四十四丁（第一冊）

第一冊と第二冊とあり、第一冊は國會圖書館藏本《よ八》の模寫本。《よ八》は、續群書類從版本に斯道文庫藏本（注16參照）の森立之の書入及び卷末識語を移寫[32]したもので、中根肅治の藏書印がある。第二冊は中根肅治『室生寺本日本現在書目錄攷』（書名は內題による）の轉寫本で、原本は佚亡したようである。第一冊と同期に作成されたと考えられる。

その他（拔粹など）　二點

①筑波大學附屬圖書館《イ〇五〇―一一二〇》

〔外題〕日本見在書目錄（簽）（扉あり「日本見在書目錄」）〔法量・丁數〕二六・六×一八・九、七丁〔印記〕「讀杜艸堂」（寺田望南・書肆）〔奧書等〕「文政紀元寅秋中浣／東房　鴨涯松浦子盈[昆侖]撰之」

文政元年（一八一八）の書寫。「醫方家」の部分（室生寺本第三十七丁裏一行～第四十一丁裏一行）のみを拔粹する。親本は甲群に屬する寫本。

②古逸叢書本底本（一八八四年刊行）

〔印記〕「田安府芸臺印」（田安家）〔奧書等〕「丁丑五月九日寫竟　中島勝延」

底本奧書の「丁丑」は文化十四年（一八一七）と思われる。[33] 甲群にほぼ共通する誤脫がみえ、また本文末尾と室生寺本識語の間に奧書が位置することから、甲群Ⅰ類に屬す寫本に、脫簡部分と室生寺本識語を補寫したのではないだろうか。ところで、山田孝雄解題は古逸叢書本を「原本に極めて不忠なる惡書」と批判する。[34] 確かに本文の一部缺落や、淸諱を闕筆するという改變はあるが、誤寫やフリガナ・圈發の脫落等は異本にも頻繁に見え、古逸叢書本が善本でないというよりも、轉寫本全體にある程度共通する性質と考えるのが妥當であろう。なお、これに先行する版本に續群書類從本[35]がある。

以上をまとめると、次のようになる。

本稿で取り上げた轉寫本は江戶時代後期から明治時代後期にかけて成立し、その數は既知を上回る三十九點である。うち甲群（脫簡あり）二十九點、乙群（脫簡なし）八點、その他（拔粹など）二點で、甲群が全體の約四分の三を占める。甲群には共通の脫簡があるが、その他の脫簡の相違により、さらにⅠからⅣの四系統に分類される。京都の書肆竹苞樓で成立したと思われるⅠ類の最初の轉寫本の脫簡がそのまま引き繼がれ、年代の變遷とともに蟲損等により缺落箇所が多樣化したのだろう。Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ類の轉寫本はⅠ類からの派生と考えられ、就中Ⅳ類の出現がやや早いようである。Ⅰ類の最も早期の流布はおそらく文化年間中頃、文政二年または四年と推定される椀齋の室生寺本購得以前であろう。また乙群のうち年代の早いものは、椀齋所藏となった室生寺本を臨模した可能性がある。

おわりに

『日本國見在書目錄』の轉寫本成立をめぐっては、江戶時代後期から明治時代にかけ、數多の學者や收藏家が携わり、それはすなわち本書の重要性が早くから認識されていたことの證左と言えよう。また、悉皆調査を通じて親子・兄弟關係が判明したものもあり、そこから浮かび上がる多岐にわたる人物の係りも、その學術界における意義を物

語り、本書の轉寫本の系統が持つ意味は決して些少ではないことをここに強調するものである。

最後に資料調査のご協力を賜った關係者および關係各機關に深甚の謝意を表したい。

注

(1) 室生寺に收藏された經緯については、猪熊兼繁「佐世撰『見在書目錄』と室生の問題」(『史迹と美術』第三十三輯ノ五〈第三三五號〉、一九六三年)の論考がある。

(2) 狩野直喜「日本國見在書目錄に就いて」(『藝文』第一年第一號、京都文學界、一九一〇年)、山田孝雄「帝室博物館御藏日本國見在書目錄解說」(『日本國見在書目錄』古典保存會第壹期、一九二五年)、和田英松「日本見在書目錄に就いて」(『史學雜誌』第四十一編第九號、一九三〇年)、太田晶二郎「日本國見在書目錄解題」(『群書解題』第二十、續群書類從完成會、一九六一年、一九七六年再版第八卷)など參照。

(3) 第六卷、岩波書店、一九九〇年

(4) 第二卷、岩波書店、一九九〇年

(5) 『日本隨筆大成』〈第三期〉五、三五五〜三五六頁(吉川弘文館、一九七七年)

(6) 森鷗外『伊澤蘭軒』七十五頁(鷗外全集第十七卷、岩波書店、一九七三年)。森が引く伊澤蘭軒『長崎紀行』文化三年六月六日の條に、竹苞樓を訪問した樣子が記され、その中に「又日本國現在書目ありといふ」とみえる。『伊澤蘭軒全集』七(オリエント出版社、一九九八年)收錄の蘭軒自筆稿本『長崎紀行』影印も併せて參照。

(7) 國立國會圖書館藏本《よ八》(乙—⑧參照)の、原表紙見返しの朱筆識語(ただし大半を朱で見せ消ち)の中に「□齋翁旧藏遊仙窟卷□ニ古大須室生寺本トアリ□□写シ誤ニアラスカナホ考フベシ」と見える。なお念のため、大谷大學圖書館藏狩谷棭齋自筆校本『遊仙窟』《外丙一七二》をマイクロフィルムで閲覽したが、同內容の書入は確認できなかった。

(8) 梅谷文夫『狩谷棭齋』一七〇頁(吉川弘文館、一九九四年)

(9) 靜嘉堂文庫「書誌學者自筆本目錄(抄)」(『書誌學』第四卷第四號、五十五頁、日本書誌學會、一九三五年)、川瀨一馬「靜嘉堂藏棭齋自筆本解說」(『書誌學』第四卷第六號、四十八頁、日本書誌學會、一九三五年)、注8同書一七〇〜一七一頁などは、室生寺本の臨模とする。

(10) 注8同

(11) 一例として、森銑三「棭翁雜記」(『書誌學』第四卷第六號、日本書誌學會、一九三五年)に引用された、西田直養(國學者・一七九三〜一八六五)『筱舍漫筆』「本朝見在書目錄」の條に「本朝見在書目錄といふ本一冊、屋代翁より借覽す。是は先年望之上京の時、ふと得たりしとぞ」とある記事が擧げられる。

(12) 注8同書卷末略年譜參照

(13) 本書については全文の翻刻を豫定している。

(14) 注8同書二六七〜二六八頁

(15) 小長谷惠吉(『日本國見在書目錄解說稿』五十六〜六十頁、小宮山書店、一九五六年)は『筱舍漫筆』の記事(注11參照)により、室生寺本所藏者として棭齋の次に屋代弘賢を擧げる。

(16) 山田孝雄「日本現在書目證注稿解題」(狩谷棭齋全集第七『日本現在書目證注稿』日本古典全集刊行會、一九二八年。これに少々加筆したものが『典籍說稿』西東書房、一九三四年に收錄)參照。塙忠寶編纂の續群書類從版本に、棭齋による隋志・唐志各々の著錄本と未錄本の注記を森立之が移寫し、さらに日本傳來と西土傳來の別を加えたもの(濱野知

三郎舊藏・慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫現藏《八〇九―一b―二八―一》）に見える識語である。本書にはこれに續いて「皇國所傳李唐之遺卷、亦爲不尠矣、皆是『見在書目』中所錄者也、其在于今日者、雖闕卷斷紙、於書名上直以朱筆爲團圈以表之、其在于彼而不傳于此者、以朱筆爲圓輪以別之、其無朱記者皆爲逸書也、立之又書、／嘉永壬子五月三日塙氏所贈翌四日一讀過源立之」とあり、森は塙から嘉永五年（一八五二）に續群書類從版本を贈られている。また、さらに續いて明治十七年（一八八四）の識語「梜齋嘗令人精摸『見在書目』、因自就隨唐二志校之、隋用藍筆、唐用朱筆、隋唐二志不載者、上頭施圓圈子以爲之別、今一々於此書字傍寫之、余亦比校二志、以補其遺漏云、甲申夏日七十八翁森浴仙」が記される。（『斯道文庫貴重書蒐選圖錄解題』六十五頁に本書識語部分の影印を掲載）

（17）「日本國見在書目錄（藤原佐世履歷）」（『難波江』巻之四下、日本隨筆大成〈第二期〉二十一、三五七頁、吉川弘文館、一九七四年）

（18）つとめて原文のまま引く。

大宋平王宛收其圖籍沿河西上經砥柱漂沒而存者惣八万餘卷
白是圖籍在祕書舛文館集賢司經崇文太帝皆藏書之氏然集賢
氏寫皆御本也定以甲乙丙丁分寫四部有經史子集四庫兩京各
一本共一十二万五千九百六十卷開元十九年車駕發京時集
賢四庫書惣八万九十卷癸
經庫一万三千七百五十二卷癸史庫二万六千八百廿卷
子庫二万一千五百四十八卷集庫一万七千九百六十卷
七緯　易緯　書緯　詩緯　礼緯
樂緯　孝經緯　春秋緯

（19）伴信友校藏書が京都大學に收藏された經緯について、同大學附屬圖書館參考調査掛綾部房子氏に調査のご協力をいただいた。

（20）『比古婆衣』上、一三三～一三四頁（現代思潮社、一九八二年）

（21）例えば、市村文庫本は第四十一丁表三行「董逼注」・同四行「巢元方撰」・同五行「陶隱居撰」・同六行「沙門菩提造」等を脱落するが、九州大學本にはこれらの脱落はない。

（22）『改訂增補內閣文庫藏書印譜』十二頁（國立公文書館、一九八一年）

（23）長澤規矩也・阿部隆一『日本書目大成』第一卷解題（汲古書院、一九七九年）

（24）市島春城『春城日誌』（明治三十八年第七月以降）十月十四日條（早稻田大學圖書館藏《イ四―一九一九―五四三》）。この記載については早稻田大學圖書館調査役松下眞也氏にご教示いただいた。

（25）『京都大事典』六六八頁下（佐和隆研ほか編、淡交社、一九八四年）。「百々復太郎」の件については、京都大學附屬圖書館參考調査掛八十嶋翠氏にご教示いただいた。

（26）編纂者である塙忠寶（國學者・一八〇七～一八六二）と、安井息軒（儒者・一七九九～一八七六）の識語が刻される。

（27）水原堯榮「江戸幕末の高野山に於ける華嚴宗學者學靈上綱」（『密教研究』第十一號、高野山大學密教研究會、一九二三年）

（28）判讀については、高野山大學教授山陰加春夫氏にご教示いただいた。

（29）ただし森立之の識語のうち「嘉永壬子五月三日塙氏所贈翌四日一讀過源立之」の一文が見えない。

（30）國立公文書館內閣文庫《二一八―〇一三一》〔外題〕日本國見在書目錄〔簽〕〔法量・丁數〕三三・四×二二・四、五十二丁〔印記〕「新井文庫」〔新井政毅〕別紙に書寫し切貼〔奧書等〕「コノ原書ハ田安殿文庫藏本ヲ翻刻スル也／室生寺本ト小異大同アルモノニテコレモ古寫」「以數本參考新井政毅校正／明治廿年十一月」古逸叢書本の模寫本におそらく國會圖書館藏本《よ八》の書入及び巻末識語を移寫したもの。

（31）印文の判讀については大阪府立中之島圖書館大阪資料・古典籍課森田俊雄氏にご教示いただいた。

(32) 斯道文庫本に見えるもののほか、本稿冒頭であげた明治十二年の識語も書寫する。

(33) 田安家藏書は三代齊匡の時代、寛政七年（一七九五）から文政五年（一八二二）頃にかけ擴充が進んだが、明治初年に一部流出したという。松方冬子「田安家藏書の傳存について」（國文學研究資料館編『田安徳川家藏書と高乘勳文庫』二〇〇三年所收）參照。

(34) 注16山田孝雄解題參照。同解題はさらに第四十四丁と第四十五丁とは前後錯簡するというが、東京大學附屬圖書館藏《A00—4006》および國會圖書館藏《082.2—Ko537R》の古逸叢書本を閲覧した限りでは認められなかった。

(35) 塙忠寳の卷末識語に「縮臨大和國室生寺所傳之本入彫」と見え、室生寺本の縮臨。なお、塙家舊藏本（I—⑦）には脱簡があるが、續群書類從本にはない。

参考　『日本國見在書目錄』轉寫本關連年表

年代	西暦	事項
平安末		※この頃室生寺本成立か。
文化三年	一八〇六	六月六日、伊澤蘭軒、京都の書肆竹苞樓にて、室生寺本の所藏を聞く。
		七月、橋本經亮『梅窓筆記』、竹苞樓より刊行。
		※この頃脱簡のある轉寫本が流通か。
文化十三年	一八一六	十一月、佐川町立青山文庫本奥書（Ⅳ—②）
文政元年	一八一八	十二月、京大附屬圖書館本奥書（I—①）
文政二年	一八一九	九月五日、狩谷棭齋自筆書入本奥書（I—②）
文政四年	一八二一	狩谷棭齋三度目の西遊　三月十四日京都着
		狩谷棭齋四度目の西遊　四月八日京都着
		四月十六日、國立國會圖書館本奥書（I—③）
文政十一年	一八二八	六月、阪本龍門文庫本奥書（乙—①）
天保六年	一八三五	二月二十日、國立國會圖書館本奥書（Ⅳ—⑤）
		閏七月四日、狩谷棭齋沒。以後天保八年から九年にかけ、棭齋收集の古典籍賣却される。
天保九年	一八三八	三月二十二日、都立中央圖書館本奥書（I—④）
天保十五年	一八四四	三月二十四日、神宮文庫本奥書（Ⅳ—⑥）
弘化三年	一八四六	五月一日、大阪府立中之島圖書館本奥書（乙—③）
嘉永四年	一八五一	一月、西尾市岩瀬文庫本奥書（Ⅲ—③）
		十二月十日、安井息軒識語（續群書類從版本）
安政七年	一八六〇	『續群書類從』見本版の一冊として刊行。
明治二年	一八六九	三月上旬、宮內廳書陵部本奥書（Ⅲ—⑥）
		春、森立之、室生寺本を入手。その後一時人手に渡る。
明治十二年	一八七九	十二月、森立之、室生寺本を再入手。
明治十三年	一八八〇	春、森立之、室生寺本を高木壽頴に讓る。
		五月四日、高木壽頴、室生寺本を東京博物館に奉獻。
明治十七年	一八八四	七月、清の黎庶昌、『古逸叢書』を東京にて刊行。